

3. 研究計画

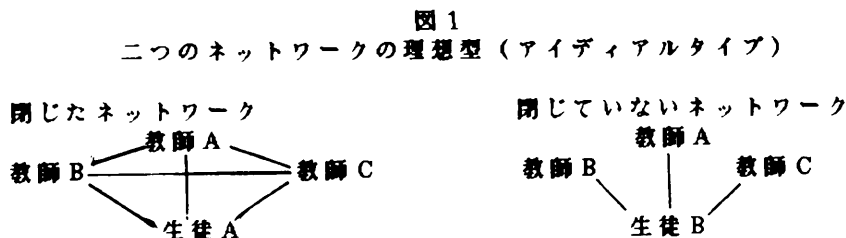
- ① どのような研究方法で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に全体を2,000字程度で記入すること。
- ② 共同研究の場合は、申請者が担当する部分を明らかにすること。
- ③ 出身研究室以外の研究室を選定する場合、又は次年度に研究機関を異にする場合、若しくは一定期間他の研究所等において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載すること。
また、出身研究室に留まり研究する場合は、出身研究室以外の研究室を選定することが困難な理由を簡潔に記載すること（PDのみ。）。

(1) 研究目的（研究の背景及び国内外の研究状況等を含む。）

この研究では日本及びアメリカの高校生の非行逸脱行動について分析を行う。社会ネットワーク分析の手法を用い社会組織の理論を応用することによって、日米の生徒の逸脱行為を説明するモデルを示す。ここで逸脱とは、例えば、学校共同体のルールや規範に反する行動や態度といった類のものを指す。研究の中心となるのは、この逸脱現象と学校内の社会ネットワークの関連である。ここで、社会ネットワークとは、生徒間の結びつき、教師間の結びつき、そして生徒と教師間の結びつきを指す。これらが形成するネットワークがいかに学校組織を特徴づけ、いかに生徒のもつ規範や学校共同体への帰属心、そして逸脱傾向に影響するのを探る。日本と米国の両方を調査する理由は国際比較により、「学校内ネットワークの形態は教育文化、制度の違いに起因する」という仮説を検証するためである。これについては「研究の特色」の欄で詳述する。この研究計画は経験的研究を含む。データの収集に関しては年次計画の欄で述べる。

(2) 研究内容

手始めとしてメンターネットワークという概念を提案する。特にコールマン(1990)のネットワーク概念である「ネットワークの閉鎖度 (network closure)」を応用し、生徒と個人的に交流のある教師達（これよりメンターと呼ぶ）の間に、日常的なコミュニケーションがあるかどうかに着目する。図1の左の生徒のネットワークにおいてはメンターの間にコミュニケーションが存在する。右の生徒にはそれが存在しない。



左のように、生徒を知る教師、つまりメンター同士が、緊密な同僚関係をもてば、そのネットワークは閉じている。後に述べる理由から、閉じたネットワークは生徒指導に適したものであり、さらに生徒の逸脱の度合いを弱めるという仮説を提案する。

ネットワーク閉鎖の概念はコールマンの社会資本の研究(1990)において中心的位置を占めた。閉鎖という概念によって、彼はネットワークの閉じた状態、つまり、個人それぞれがお互いを知る状態において、集団はソーシャルコントロール(S C)の能力を持つと考えられる。S Cとは、パークスらのシカゴ社会学派のいうように、集団組織が強制する事なしに、個人それぞれの行動に影響を及ぼす能力を指す。閉鎖したネットワークは、教師間の交流を盛んにし、教師同士の影響力や、お互いをモニターする能力を高めると考えられる。こうして生成される学校組織のS C能力は生徒の内的な規範に訴えかけ、生徒の逸脱行動を抑制すると考えられる。

(2) つづき

ここで3つの構造的プロセスを想定する。まずは、メンター同士が協力して、生徒を見守ることにより、教師のネットワーク集団の生徒モニター能力が増す。次に、閉じた状態にあるメンターネットワークを持つ生徒は、一つの共同体に属しているという強い感覚、あるいは絆の強い連帯 (Portes & Sensenbrenner 93) を持つ。最後に、コールマンが指摘したように、閉じたネットワークは、メンバーの間の信頼関係を強め、個々の教師が責任をもった共同体の一員と感じる。以上が構造的プロセスに関する3つのモデルであるが、これらのプロセスは教師集団のソーシャルコントロール能力を高め、生徒の逸脱傾向を抑止すると予想される。これらのプロセスの存在、及びいかにそれらが、社会的コンテクストに依存しているかを探り、統計分析によって仮説検証する。

理論的課題と研究の方向

ここで提案したメンターネットワーク閉鎖の概念は、「閉じかた」の度合いに関する単純かつ形式的な概念にすぎない。一体どのようなメンターによってネットワークが形成されているという点については、まだ理論化がされていない。まず、第一のステップはネットワークの質を問うことである。エスニシティや性別の構成がその例である。マリノリティの立場にある生徒を同じマリノリティの立場にいて生徒の経験をよく理解するメンターによるネットワークであれば、生徒は教師に対し信頼が増し、教師集団のソーシャルコントロール能力を増加させることになるだろう。またメンターの教育方針も重要な要素である。メンターの教育方針や実践に一貫性があるほど、生徒の規範生成が安定するという可能性が考えられるであろう。第二に理論的発展が必要とされる点を述べる。メンターネットワークは、学校内外に存在する複雑な社会構造のほんの一部を取り上げたにすぎない。この点を修正するための三つの項目を述べる。まず、なにが閉じたメンターネットワークを生成するかという点である。学校の制度的特徴を考えると、教師間の交流を促す「装置」が鍵つか考えられる。例えば、学校の建物配置及び職員室の空間的特徴、教職同士が交流する会議や研究会、あるいはクラブ顧問同士の交流度に影響する要素としてクラブ活動があげられる。もう一つの項目として、「組織構造の影響を受けて生徒の逸脱傾向が抑制される」という仮説が正しいとすると、このことが生徒の人間形成や学業到達度にもたらす影響を探索する必要がある。第三に、家庭環境やコミュニティーなど学校外にある要因にも注目する必要がある。これらの項目の追加によって、より豊かなモデルの創造が可能となるであろう。日米比較の論点に関しては、次ページの研究の特徴において議論する。

(3) 年次計画

(1年目)

逸脱及びネットワークに関する概念的な研究。

シカゴ社会学派の逸脱論及び、ソーシャルコントロール論の文献研究。

(2年目)

既存の米国データの分析。LSAY (アメリカの青年の時系列的な研究)

のデータを分析する。日本の高校生に関しては、米国データと比較可能な調査票を作成し、日本の幾つかの高校において調査を実施する。統計分析。

(3年目) (D C 2 は記入しないこと。)

日米の分析結果を比較し、いかに教育制度の違いが

学校組織及び教師ネットワーク、さらに生徒の逸脱の問題に関連しているかを研究する。

(裏面につづく)

(4) 研究の特色・独創的な点

日米国際比較と社会政策的意義

研究の特徴は国際比較にある。これによって前頁で議論したプロセスがさらに、様々な社会要因の中に存在するという可能性を追求する。日本と米国の教育文化、制度の違いがいかに関国の教師間のネットワークの体系に関連しているかということは興味深い点である。ここで教育文化の違いとして有意義な絶頂を幾つか挙げておく。例えば、「担当」の制度に関していえば、日本の中高では教師は学年を担当する。英語や数学の教師であると同時に（あるいはそれ以前に）、日本の教師は特定の学年を担当する教師である。米国では、その習慣は小学校レベルで終わり、中高においては、教師は学科を担当する。従って、日本においては同学年の生徒を共通に知っているという教師が米国に比べて多いと思われる。つまり、閉じたメンターネットワークが多いと予想される。また、「学級編成」の方法において両国は異なる。日本においては、生徒が一つの学級を形成し、クラスの全員が同じ教室で一日を過ごし、団体行動をとるため、同じ学級の生徒のメンターが似通っていると想像できる。従って「メンター同士がお互いを知っている度合い」が高いのに加えて、生徒自身も同じメンターによって教育を受ける度合いが高く、まさにコールドマンのいうところの閉じたネットワークの重層形成が見られる。これは米国の高校ではあまり見られない状況であろう。「教育文化及び習慣の違い」がいかに関「閉じたネットワーク」あるいは「生徒の逸脱傾向」に関係しているかを理解するには日米の国際比較が有効であると考えられる。国際比較は同時に自国の状態を理解する鍵を提供する。近年、日本の学級崩壊が指摘されている。この背後には、学校の教師集団のソーシャルコントロール（SC）能力の低下に起因している可能性もある。あるいは、SCが強制的な生徒管理の目的に偏ってしまい、生徒と教師の信頼関係に悪影響を与えている可能性もある。低学力化、非行行動、いじめの問題などの逸脱現象が問題となるなかで、本研究は教育政策上、有効な提案を示すであろう。社会政策への貢献もこの研究の特徴であると言える。

レフェレンス

- Coleman, J. S. (1990). *Foundations of Social Theory*. Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press
- Portes, A. and J. Sensenbrenner (1993). "Embeddedness and Immigration: Notes on the Social Determinants of Economic Action." *American Journal of Sociology* 98(May): 1320-1350.